

耳を澄ませて 一部になる様にデザインをする



隈 研吾氏

建築家
株式会社隈研吾建築都市設計事務所

1954年 横浜市生まれ。1990年、隈研吾建築都市設計事務所設立。
慶應義塾大学教授、東京大学教授を経て、現在、東京大学特別教授・名誉教授。
30を超える国々でプロジェクトが進行中。自然と技術と人間の新しい関係を切り
開く建築を提案。
主な著書に『点・線・面』（岩波書店）、『ひとの住処』（新潮新書）、『負ける建築』
（岩波書店）、『自然な建築』、『小さな建築』（岩波新書）、他多数。

土いじりが好きなおとなしい少年は
第1回東京オリンピックで国立代々木競技場と出会い
建築家になりたいという強い意思を持った
バブル崩壊後地方の仕事で初めて木造の世界の凄さを知る
木は木の建築だけで完結しているのではないと

木のロジックに 建築はむしろ自然の

木と緑をいかに運動させるかが日本の地方を救うことに繋がる
将来を担う若者には手を使ってモノを作ってほしい
一人のデザイナーより一緒にやろうと仲間が集まるのが重要な時代
日本にはこれからの環境の時代のヒントが溢れている
本当にありがたい国に生まれたと思う・・・



石原 和幸氏

景観アーティスト、庭園デザイナー
株式会社石原和幸デザイン研究所 代表取締役

1958年長崎県生まれ。22歳で生け花の本流「池坊」に入門。以来、花と緑に魅了され、花の路上販売、店舗販売を経て庭造りを始める。その後、苔を使った独自の世界観の庭が、国際ガーデニングショーの最高峰である「英国チェルシーフラワーショー」において高く評価され、2006年から3年連続、引き続いて2012年から8年連続で金メダルを受賞。2019年まで前人未到の計11個の金メダルを獲得し、ショーの総裁を務めるエリザベス女王から「あなたは緑の魔術師ね」との言葉を頂く。日本の玄関口でもある羽田空港第一ターミナル内に受賞作品「花の楽園」を再現するなど、「世界を花と緑でいっぱい」をスローガンに、壁面緑化事業、環境保護事業にも精力的に活躍する。長崎の新たな観光地として日々進化する終わりのない庭園「三原庭園」を展開中。著書「写真集 石原和幸の庭」「世界一の庭師の仕事術」

国立代々木競技場に 憧れて建築家を目指す

石原 本日は建築家の隈研吾さんを指名させていただきました。お忙しいところ、お時間を頂きましてありがとうございます。今日はどうぞ宜しくお願い致します。

隈 こちらこそ宜しくお願いします。

石原 先生とは静岡県の富士山を望む名勝地「日本平夢テラス」とい



う展望台のプロジェクトでお会いしたのが最初ですね。先生は、富士山を正面に日本平山頂に1周約200メートルの空中回廊を回遊できる自由さに加え、南アルプスのパノラマビューを楽しめる展望施設を手掛けられて、材料は静岡産のヒノキを使用されたのでしたね。その時庭園を私が担当したのです。確か2018年だったと思います。それから何度かお仕事を一緒にさせていただくようになりました。先生の名前を知らない方はいらつしやらないと思いますが、実は私自身も存じ上げないことが沢山ありますので、この機会にいろいろとお伺いしたいと思えます。幼少の頃はどんなお子さんでしたか？

隈 そうですね、庭の土いじりが好きなおとなしい子どもでしたね。

石原 建築家になろうと思われたきっかけを教えてくださいますか？また、それはいくつ位の頃でしたか？

隈 1回目の東京オリンピックですね。1964年、私は

小学校4年生でした。子どもにとってオリンピックというのは大事件ですよ。父親に連れられて、渋谷の国立代々木競技場に行った時は本当にビックリしましたね。父親はそれまでも時々、東京に新しい建物が出来ると連れて行ってくれたりしていたのですが、それでもやはり国立代々木競技場は、デザインのレベルが違うと感じました。外観で驚いて、そして中に入るとまたインテリアがすごくてね。「これはどういう人が造ったの？」と訊いたら「建築家という人が造るのだよ」と教えられ、それで「自分が絶対にやりたい」と思ったのです。小学校4年生からの意思はぶれませんでしたね。

石原 すごくですね、そこから建築の道に進まれたわけですが、現在に至るまでに「この建築家、すごいなあー」と思われた方とか目標になさった方はいらつしやいますか？

隈 そうですね、自分の中ではフランク・ロイド・ライトが最大最高の存在ですね。フランク・ロイド・ライトの建築は、もちろん日本でも帝国ホテルとか自由学園とかがありますが、やはりニューヨークに留学し

た時にアメリカ中のライトの建築を何10軒も見てまわりました。現地に行ってみると、ライトの建築というのは本当にすごくて、場所との関係性のようなものがとてもよく計算されています。他の建築家とレベルが違うな、と思いましたね。

石原 それはランドスケープと建物の融合、ということなのでしょうか。

隈 まさに石原さんが目指されているところと同じだと思います。ランドスケープというものに対して本当に繊細な感性を持っていて、それに建築が応えるようにして造っているのです。ランドスケープとの間にダイアログ、会話があるみたいな感じがライトの建築にはあるのです。そこが他の建築家と大きく違っているところで、特に有名な作品に「落水荘」というのがあるのですが…。

石原 あれはすごいですね。家の中を滝が…ですね。

隈 溪流が家の中に入ってくるようにして造ってあります。あの良さは写真で見ただけでは分からなくて、やはり現地でも溪流の音を聴いて初めてその素晴らしさが分かるような感じでした。



NIHONDAIRA YUME TERRACE©Kawasumi・Kobayashi Kenji Photograph Office

石原 先生は、よく「木」を使っている感じがしますね。フランク・ロイド・ライトに影響を受けたというか、「すごいな」と感銘を受けられて、その後のような経緯や変化があって、現在の先生のスタイルになったのでしょうか。

隈 1985年から1986年にかけてニューヨークに行ったのですが、戻ってきてすぐ日本のバブル期に建築事務所を始めました。最初の4、5年はとても忙しかったのですが、1991年にバブル経済が崩壊したことから、東京での仕事が全部キャンセルされてしまっ、それで地方を回るようになったのです。梣ゆずり原町はらちようという高知の山奥の小さなプロジェクトを頼まれた時に、「地元の大工さんとやってくれ」というようなことを言われて、ある意味そこで初めて「木造」という世界に出会ったのです。そして「この世界っておもしろいなあ」と思って、1990年代は地方

の小さなプロジェクトを木でやるというような感じでした。全く東京の仕事がなかった10年間があって、その時本当に木造の凄さを知りました。

石原 私は、法隆寺の「夢殿」にヒントを得たという日本平の建築を見て、すごいなと思いました。天井の木組みにすごく感動したのですが、ああいう発想というのはどういところから生まれるものなのですか？

隈 世の中にはコンクリートに木を張りつけるような使い方をしている人もいますが、木には木のロジックみたいなものがあって、木のロジックを使って木だけでしか出来ないカタチをつくらうとすると、自然に木組みのおもしろさみたいなものを見せたくなりますよね。ご一緒した日本平のプロジェクトなどは、まさに木のロジックというものに耳を澄ませうと思って、造っていくと、あのようなカタチになったのです。

石原 今後もやはり木をメインに置きながら進んでいかれるのでしょうか。

隈 そうですね、私はこれからもやはりメインには木を置くことに

なると思います。と言うのは、1990年代に地方で小さな仕事をやっている時には、「地球温暖化」などということはまだ言われていない時代でした。「木を使うことが地球温暖化の解決になる」と言われはじめたのは2000年以降です。1990年代の木の使い方は、質感がいいとか温かい感じがするとか、という心理的なものだったので、2000年以降は木を使うことが科学的に人類を救うことに繋がることがわかってきました。木に対して、世の中全体の注目が集まってきている気がします。私はそういう新しい状況を見ると、やはり日本はまだまだ木の使い方が少なすぎると思いますよね。

石原 例えばRCの場合は山を掘削したりして、すごいエネルギーをかけて強度なものが出るのですが、木は循環というか、植えて50年したら使えるとか、そのエリアでもそれが産業になっていきますよね。今、山が廃れていく中で、林業というものの可能性を広げていくためにはどうしたらいいのだろう、と書いていますが、先生はどう思われますか？

隈 木というのは、木の建築だけで

完結しているのではなくて、その後社会のいろいろなシステムがからんでいます。木をどう育てて森をどう維持していくか、そこから木を切る産業、加工してデザインする産業等が全部木の背後に控えていて、トータルにデザインしないといけないのですね。日本の昔の経済というのは、木を中心とするサイクルがちゃんと回っていたので、自然と森は健康な状態に保たれますし、森がよい状態だから洪水も減らせたし、森がよい状態だから川もきれいになって、そのおかげで海の魚も豊かになっていました。今はそのサイクルがズタズタにされてしまっている

ので、洪水が増えるとか水が汚れて魚が獲れなくなるとか、破壊の影響が我々の生活にまで及んできているわけです。ですからそのサイクルをもう一度取り戻すには、木をちゃんと使って建築を建てる、都市を造るというのが基本だと思っていますね。

石原 森の手入れも含めてということですよ。以前は炭焼き職人がいたと思いますが、コナラやクヌギを切つて、10年程するとひこばえ（若芽）が出て、という循環があったと思います。ところが今はもうエネルギーとして炭が必要とされなくなっていますね。近年、高層ビルが50階、100階となっていく中で、木造と高層に対する考え方というのが必要になってくるのではないのでしょうか。私はその辺のところは素人によく分かりませんが、可能性もあるのでしょうか？



隈研吾氏

隈 現在は、高層ビルにも木を使うようになりました。2000年から、地球温暖化対策に有効だということが言われるようになって、欧米が木に対してバーツと注目したのです。むしろ、欧米では日本以上に木の建築に対して注目が集まって、政府が木の建築を推奨するということが起こりました。政府が推奨したことによって技術も進歩して、木で超高層ビルが建てられるようになっていきます。現在は、欧米では10階建てぐらいのマンションは問題なく全部木で造れるという時代になってきています。森を良くするというだけじゃなくて、地球温暖化対策にもなるし、省エネ建築のようなものを造る時にも木というのは非常に大きな

メリットがあるので、そういう意味でのサイクルが欧米の方で先に回りはじめた感じがあります。それに比べると、日本はちょっと遅れを取っていて、建築基準法なども木造を使い易くしようとか、最近は農林水産省なども建築に対する法律を変えたりしましたけれど、もつと日本には頑張つてほしいな、と思いますね。

石原 木造建築が発展すればするほど日本の森が守られて、当然ながら川も海もきれいになる、そういうことでしょうか。

隈 そうですね、それが地球温暖化対策にもなって、都会の空気もきれいになって、そういういろんなことが派生的に生まれてくるのではないかな、と思いますね。

石原 今、日本では中心である東京にどんどん人が集まってきています。私は長崎の、人口が一番減っている所で、ささやかに「三原庭園」というのを展開しているのですけれど、木造建築が発展すればするほど林業が発展しますから、逆に地域でもつともつと、そういった循環を本格的にやっていたら、私はそこをランドスケープを合わせていきたい

と思います。そうすれば日本は本当に素晴らしい可能性が広がっていくと思いますね。

隈 先日、私も三原庭園を観させていただきました。あそこは長崎の中でもかなり行き難い場所です。ね。ずーっと登って行った所で道が狭くなって、すごく行き難い所なのに、石原さんのプロジェクトで生き返ったという感じがします。他のどこにもないような魅力が生まれて、緑で溢れているというのがすごいと思います。ね。何が魅力かと言うと、やはり「緑」というものがものすごいパワーを持って存在していると感じました。更には、緑というものがちゃんとデザインされていて、建築と緑がコーディネートされていくと、今まで不便だと言われていた場所が逆転して、普通の平地ではできないような場所が出来ています。普通の平地には三原庭園のように全体が緑の丘のようになっている感じというのには造れないので、やはり緑による逆転現象が様々な場所で起こっているのです。かつては地方というのが都会より下だというヒエラルキーで見られていたけれども、今逆

転が起こせるのではないかと、三原庭園で強く感じました。未来に対して希望が持てた思いがしました。

石原 そう言って頂いて嬉しいです。ありがとうございます。

木造建築が生み出す循環のサイクル

石原 広島県の庄原市という所は、ものすごく棚田が美しく、川の水が透き通っていてとてもきれいなのですが、そのすごく広い土地に人口が約3万3000人と、減少してきて



石原和幸氏

いるのです。例えば、そういう所を、言い方は悪いのですが「開発」をしていく、つまり木造建築の5つ星ホテルがくるとか、そういった可能性が日本全国にあるのではないかな、と思っているのです。ただ、アクセスの問題がちよつと残ってはくると思いますけれど……。

隈 私はアクセスが悪いということ、これはからの時代にはむしろアドバンテージになる可能性があると思います。普通の人は簡単には来られない、そういう場所に特別なものがあるのだ、と。そういう所に、小

さいけれどクオリティの高い5つ星クラスのホテルを木で造ることが、これからはどんどん起こって来ると思います。日本でも高級なホテルを造ろうとしたら、やはり日本にしか出来ないことを我々は探すべきです。ヨーロッパやアメリカの「ゴージャス」とは違うゴージャスを探そうとすると、我々は木と緑をいかに連動させていくか、それが日本の地方を救うことに繋がると思っています。

石原 特に東日本の大震災以降、どんどん過疎化が進んでいて、戻れない、住めないエリアがありますよね。今回、先生も私も福島県のお手伝いをさせて頂いています。私は大熊町の方のお手伝いさせて頂きました。あの辺りでも、ちよつと足を延ばしてみるとものすごい絶景があつて、こういう場所にホテルがあつたらなあ、と思ったりします。風景こそが貴重な財産なのではないか、と思いました。そのような場所に木造での建築を建てるにあたって、その地域の木材を使うことで、自然の循環が生まれるのではないかなと思われませんが、そのあたりの可能

性はどうでしょうか？

隈 そうですね、日本というのは地形も複雑で、私は今、福島の浪江町でいろいろな復興に繋がるまちづくりの取り組みのお手伝いを始めていますが、それぞれの場所でユニークなビューポイント・ランドスケープがありますよね。多分、石原さんが見れば私より多く様々なものを発見されると思いますが、そういう日本のそれぞれの場所の固有性を木の建築と緑のデザインで、引き立てることが出来ると思いますし、復興にとってもそれが非常に大事なことだと思います。どうしても、復興というと、大きな建物をバーンと造るという風に勘違いしている人がいるのですが、どこにもあるような箱物を作っても、やはりその地方というのは蘇りません。蘇らせるためにはその場所にある元々の風景みたいなものをどういう風に磨くかということが、一番大事だと思いますね。

石原 先日、先生は長崎で「小さくてもいいけれど、とんがった図書館が欲しい」とおっしゃいましたよね。古い家でもいいのではないかとお話しいただいたのですが、そういう

ことは、日本の各地方でもあり得るのでしょうか？

隈 私が図書館で面白いと思ったのは、ネットが世の中に広がって情報が得られるようにはなりましたが、実は、リアルなものから得られる情報と人間との関係は、ちょっと違うと思うからです。本の場合、本のおいや紙の質感など、それらを含めて自分達の記憶に残りますし、何か1冊でも特別な本に出会ったら、その質感は一生忘れられない。そういう特別な本に出会えるような図書館です。いわゆるベストセラーだけを揃えるのではなく、むしろ逆で、本にマニアックで、小さな世界だけどその世界に対してはすごいものを持つている、みたいなものを作ったら、世界中から人が来るようになると思うのです。だからこそ、三原庭園にもそういう特別な図書館を造ることに、大賛成したわけですね。

日本のものが これからの建築のキーになる

石原 それからお伺いしたいのは、現在、ウクライナとロシアの戦闘等



がある中で、日本は微妙な立場にあると思つています。今後、日本はどうなっていくのか、ということなのです。私の考えですが、日本は北海道から沖縄まで、本当に美しい建築や様々な景色があり、人々の優しさや思いやりがあり、その上美味しい食べ物があります。これが日本の武器だと思えます。漠然とした話だと思われるかもしれませんが、先生は、今後、日本がどんな風になっていくべきだと考えていらつしやいますか？ 次世代の子ども達、またその子ども達にとつて、日本が世界に誇れる国になるには、建築とかランドスケープを含めてどのようになつていけばいいと思われませんか。

隈 日本というのは、この狭い国土の中でもすごく密度が高いのですが、実はそういう高密度の中でも、とても快適に自然を感じながら生きていくというライフスタイルをつくった国だと思つています。そのライフスタイルというのは、世界にあまり例がありません。近隣の中国などと比較しても、近いようには見えなくても自然に対する態度は全く違いますよね。自然を征服するという西洋

的な考え方に近いものが中国にはあるように感じます。欧米ははつきりと建築は自然を征服するための道具だ、と考えてきました。でもそんな中で日本は違つていて、建築というのはむしろ自然の一部になるようにデザインしなさい、という風に、人からずーっと教えられてきた。これこそが、環境を重視する時代には世界のモデルになり得る、模範になり得る方法だと思えます。日本のような建築の方法をしないと人類はもう滅びてしまうよと、感じている人が欧米の人達の中には、結構いると感じます。そういういい感覚を持った感度のいい欧米の人達が、石原さんの庭をすごく好きで、そういう人達はチェルシーのガーデンシヨードも石原さんの庭を見に来まつてくるわけですね。私に建築を頼んでくる人も、そういう感性の豊かな欧米の人達が多いです。そういう敏感な人達は、日本というものが世界を救う可能性があることを感じてくれている。ただ、当の日本人の多くがそういうことを分かつていないのではなにかと思つています。私はそれがとても残念なのですが、石原さんや私な

どが日本全体にもつと自信をつけさせるようなことができたらいいと思つし、それでできれば嬉しいですね。もつと世界という舞台に出て仕事をすることで、日本人は改めて尊敬される存在になれると思つています。

石原 先生は木や石、ガラス、布などの素材を建築に使つていらつしやいます。それから先日是小松大学の制服も作られたとか？

隈 制服というのではありませんが、卒業式の時に着る「アカデミーガウン」です。

石原 本当に驚きましたが、そのアカデミーガウンのデザインも建築と同じような流れでできるのでしょか？

隈 建築の場合も、最近布みたいな柔らかい材料を私はたくさん使いますよ。コンクリートや鉄ではなくて、日本人は木と紙と布を使つて家を造つていたわけです。そういう柔らかい素材にとっても興味があつて、そうすると自然に服もデザインしたくなつたりするというわけです。そういう意味で、建築家は建築のことを考えて、ランドスケープはランドスケープ、というのではなくて、

私と石原さんが一緒に仕事をするみたいに、いろいろな意味でのコラボレーションが今後どんどん出てくる時代だと思つています。

石原 木に対するイメージは日本的で、柔らかいというのがありますよね。石とかガラスという素材に対する先生のお考えというのは、どのようなものなのでしょうか？

隈 石などもね、本当に薄い石をコンクリートに貼るとというのが今までのやり方なのですが、石はもつと塊で使つたら、様々な豊かな表情が出てくる。コンクリートという制約を外して全部の素材を考えればいと思つているのです。ガラスなども、ガラスというものが持つ美しいが生きるような建築を造りたい。そうやって素材というものをもう1回復活させる時代にも、今、来ていると思つています。

石原 そういった意味で、サクラタウンは石の塊、ですよ。木の柔らかいイメージとは真逆の感じがしたのですが…

隈 サクラタウンは、地球の4つのプレートが衝突してできた武蔵野台地という場所にあります。それで、

その土地の歴史を表現するには石がふさわしいと考えました。

石原 そうですか、私は今、三重県で庭づくりをしているのですが、造っている庭は10万坪ぐらいあるもので、石1個で5トンとか10トンもあるような大きな石を探しました。山から切ってくるのではなくて、そういう石はまだあると思っています。でも、だんだん減ってきていますし、10トンの石は結構大きくて、今では構造物には使えないかもしれないのですが、そういうのがちよつと出てきたり、動かせない大きな石があった時には、それを回り込んでデザインするとか……。本当に偶然なのですが、沖縄の南城市でお庭の依頼がありましたね。

隈 ガーデンレストランの「花さんご」さんですね。石原さんにご紹介していただいて、私も行きましたよ。**石原** あそこは琉球石灰岩がいっぱいあったので、石はそのままにして家をその中に入れました。ああいうのが私は好きなのです。私は建築のことは良く分かりませんが、庭と建築が一緒になっていくようなものいろいろなチャレンジできたらしい

な、と思っっています。しかし、今はそういう石がありません。庭を造っていると、昔はよくああいう大きな石を動かしたなあ、と懐かしく思い出されます。10トンぐらいの石が下流域に流されてきているということ、は、ものすごい洪水があったのかな、と。又それをどう運んできたのか、とか、こうして考えると石ひとつつてもものすごい歴史を感じますね。

隈 それは面白いと思いますね。建築をやっている、そこに石を持つてくるのではなくて、まず石があったらそれを元にしてどういう建築ができるか、その素材を動かさないで造るといのは、ちよつと楽しそうですね。

石原 私はいつもはそんなことばかり考えています（笑）。それから、先生は「小屋」も造っていらつしゃいますよね。それもとても興味深くて。大きな建物を造られている中で、小屋という発想はどこから出てきたのでしょうか。

隈 大きなコンクリートの箱より小屋の方がはるかに庭に溶け込みやすいでしょう。庭の中にある東屋とか茶室というのは、日本の文化の重要

な伝統ですから、そういうものを復活させたいなと思ったのです。

石原 先生の思考のベースには、基本的に「日本的」なものがあるのですね。

隈 実はヒントが一番あるのは日本なのです。ヨーロッパの都市を見てヒントをもらうこともありませんが、日本にはこれからの環境の時代のヒントがいっぱいあるのです。これは本当にありがたい国に生まれたな、と思いますよ。

石原 そういうことをもつと多くの人々に広めていただいて、また知っていたただくためにも、何かメッセージをいただけますか？ 先生を目標にしている若者は、世界中にものごくたくさんいると思います。将来、「隈研吾」を目指す多くの若者達に先生が基本として伝えたいことは何でしょうか。

隈 そうですね、実際、手を使ってものをつくる勉強をしてほしい、ということですね。最近の建築の学生は、コンピューターの使い方はほとんど上手になってきていますが、手を使えなくなってきたりしています。私達は図面を引く時でも手を使って

いましたから、自然と手の動きの中で、例えば「60cm」というのはこういう感覚か」という風にして寸法を感じているのです。今、コンピューターで設計すると60cmというのは数字で「60」というだけで、手を使わないから実感として分かっていない。

石原 使い勝手が解らないのかもありませんね。

隈 ですから「身体で覚える」ということを、今の若い人達には是非体感していただきたいな、と思います。いい建築を造るには、やはり身体に気持ちのいい建築を造らないといけません。身体を使って設計することが一番大事だと思いますよ。

石原 階段なども、自分が上がるサイズが18cmなのか17cmなのか、国によって少し違っていたりしますしね。最近では、建築とランドスケープのどこに境目があるのかな、と思ったりしています。先生は、今後もいろいろな方とコラボレーションしていけるのでしょうか。

隈 そうしているいろいろなことができたら楽しいだろうな、と思います。石原さんも様々なところに興味をお持ちですから、今までの造園家のイ



対談を終えて

メージをガラッと変えて、本当に面白いこと楽しいことをされているな、と思います。それに石原さんの周りにいろいろな人がついてくるのがいいですね。先日、三原庭園に伺った時も、お店などをやっているおばちゃん達を含めて、石原ファンが大勢集まってきましたからね(笑)

隈 それが重要だと思います。素敵なことをやっている、みんなに「一緒にやりたいな」と思わせる、それがすごく重要で。すぐれたデザインでもひとりで行うのではなく、そこに仲間が集まるというのがとても重要な時代だと思います。

石原 ところで、昨年3月に開業した高輪ゲートウェイですが、あのコンセプトは、50年先を見越してデザインされたのですか。

隈 現在はまだ街ができていないのですが、街がゲートウェイのプラットフォームと全く同じレベルでできてきますから、街が来ると街から駅に本当にシームレスに繋がるようになります。

石原 先生は街づくりにも参加なさっているのですか？

隈 はい、していますよ。高輪築堤

石原 月並みですが、もしもゆっくりできる時間が取れたら、可能でなくとも結構ですが、どんなことをしたいと思われませんか？

隈 ゆっくり温泉に入って、のんびりしたいですね。

石原 そんな時間が取れるといいですね、今日はどうもありがとうございます。

隈 こちらこそありがとうございます。

石原 街の文化にしていこうということですね。素晴らしいですね。完成を楽しみにしています。最後に本当に超多忙な生活の中で先生が一番ホッとする空間や時間を教えてください。又ご自身の健康管理はどのようにされていますか？

隈 歩ける時はなるべく歩くようにしています。また、ストレスのたまることはしないようにしています。長いだけで中身の無い会議などは、ストレスがたまるので避けています。

石原 月並みですが、もしもゆっくりできる時間が取れたら、可能でなくとも結構ですが、どんなことをしたいと思われませんか？

隈 ゆっくり温泉に入って、のんびりしたいですね。

石原 そんな時間が取れるといいですね、今日はどうもありがとうございます。

隈 こちらこそありがとうございます。